

「救いたい心」をつむぐコミュニケーションマガジン

# 赤十字 NEWS

Japanese Red Cross Society NEWS

<https://www.jrc.or.jp>

令和3年11月1日(毎月1日発行) 赤十字新聞 第978号 昭和24年9月30日 第三種郵便物認可

NOVEMBER 2021 NO.978

# 11



わたしも赤十字 寄付の協力者 吉村文次 (よしむら・ぶんじ) さん【P.4でご紹介】

## 特集

家族の時間、家族の思い出を奪っていく新型コロナ

# 最後まで、幸せを守りたい。

赤十字の最新情報をSNSでチェック!



赤十字新聞 編集・発行/日本赤十字社 広報室 〒105-8521 東京都港区芝大門 1-1-3 TEL: 03-3438-1311 一部20円 赤十字新聞の購読料は会費に含まれています。

人間を救うのは、人間だ。

 **日本赤十字社**  
Japanese Red Cross Society

# 家族の時間、家族の思い出を奪っていく新型コロナ

# 最後まで、幸せを守りたい。

入所者と談笑する日赤職員(レクロス広尾)



特別養護老人ホームで余生を暮らし、最期を迎えること。超高齢化社会の日本で、それは特別なことではありません。しかしコロナ禍の福祉施設は、想像だにできなかった困難に直面しました。ホーム入所者とその家族の心を守ろうとした日赤施設の取り組みを紹介します。



2019年、施設の遠足に参加した尚子さん(左)と嘉子さん

日本赤十字社総合福祉センター 特別養護老人ホーム レクロス広尾

## 小川嘉子さん(母・享年94歳)・持井尚子さん(娘)

今年1月、東京都内にある日赤の特養「レクロス広尾」で、小川嘉子さんが94年の人生に幕を下ろそうとしていた時、娘の尚子さんはベッドのそばで「レクロスで最期を迎えられてよかった」という思いをかみしめた。次から次へと嘉子さんを訪ねてくるレクロスの職員。別の施設に異動していた人まで来た。尚子さんの不安に常に寄り添ってくれた生活相談員の並木さん。並木さんは、意識が朦朧としている嘉子さんの耳元で宝塚の「すみれの花咲く頃」を歌った。宝塚ファンの嘉子さんのために練習したのだ。嘉子さんは一晩中尚子さんに手を握られながら、明け方静かに息を引き取った。あれから9カ月。尚子さんはコロナ禍で面会ができなかった日々を振り返る。「会いに行けないのに、母の具合が悪くなったと連絡が入る。母が、家族に見捨てられたと感じたらどうしよう、このままお別れがくるのは嫌だ。焦燥にかられて、母を自宅で看取ります、と施設に伝えました」。

尚子さんは介護の学校にも通いだした。不安を抱えながらも突き進む尚子さんをレクロスの職員は止めなかった。「それが尚子さんの望みなら、そう言って看取りに必要な準備と一緒に考えてくれました。そのうち、私も冷静になり、こんなに家族の希望をかなえようとしてくれるレクロスであればと、考えが変わったんです」。そしてレクロスでの看取りが始まった。コロナ禍で一般の面会が制限される中、看取りの終末期に入ったため、尚子さんが居室に泊まり込むことが認められた。尚子さんは最後の2日間、職員と一緒に体を清拭するなどのケアに携わることができた。「こんな社会状況であっても、素晴らしい看取りの時間が持て、言葉にならないほど感謝しています。たくさんの方に温かく見送られて、母も寂しくなく旅立ってきました」。この経験から尚子さんは、介護職の資格を取得、「私も、他の方の看取りや家族のケアができれば…」と新たな希望を抱いている。

レクロス広尾 生活相談員

## 並木江里子さん

「レクロスは全室個室、さらに10人で1ユニットという少人数グループで生活するため、コロナ禍でも看取り期にはご家族がお部屋に泊まることを認めています。しかし通常の面会は制限されるため、尚子さんは大好きなお母様と会えないことに追い詰められ、自宅で看取することを考えました。でも、自宅での看取りはレクロスがサポートできない領域で、尚子さん一人で行うのは不可能です。どうすれば実現できるか一緒に検討を重ねました。結果、レクロスでの看取りを選ばれ、多くの職員がお見送りすることができました。私も宝塚の歌をYouTubeで見覚えて、嘉子さんに聞いてもらえて…。コロナ禍で福祉施設で暮らす方々やご家族にとって困難な状況が続いていますが、施設の職員は皆、できる限りの希望はかなえて差し上げたいと考えています」



レクロス広尾の屋上庭園で入所者とおしゃべりする並木さん(右)

### コロナ禍でも充実した日々を



コロナ禍で外出できないが、レクロスでは施設内でも充実した時間を過ごせるよう、定期的にイベントを開催している(夏祭りの様子)

# コロナ禍で消えた記憶。それでも諦めない。

日赤福岡県支部 特別養護老人ホーム やすらぎの郷

## 山崎清さん(84歳)・和子さん(82歳)

10月中旬、福岡県にある特養「やすらぎの郷」の施設内に設置されたテントの面会席。分厚いビニール越し、山崎清さんは和子さんの顔を見ながらマイクに向かって呼び掛けた。「お母さん、来たよー」。スピーカーから清さんの声も流れても、和子さんはぼんやりしている。清さんは「やっぱり機械を通した声じゃ、伝わらないか…。8月に福岡でも緊急事態宣言が発令され、やすらぎの郷も何度目かの面会中止を決断した。10月になって面会が再開し、清さんは2カ月ぶりに和子さんと会えたが…認知症が進行している和子さんの反応は薄い。しかし、1年半前に大きなショックを乗り越えた清さんは、これくらいで希望を失うことはない。

和子さんが「やすらぎの郷」に入所したのは2019年6月。入所の翌日から毎日、清さんは和子さんの居室を訪れた。髪をクシで整え、耳掃除をし、車椅子の生活でむくんだ足をもむ。温泉が好きだった和子さんに二人で行った温泉の話をしたり、離れて暮らす息子や孫の話をしたり。ピンクのマニキュアを手に入れて和子さんの爪に塗ってあげたときは、和子さんも「きれい」と喜んだ。清さんはいつも、面会の際には夫婦で暮らしていた頃の服を着た。少しでも思い出してもらうために。

どンドン、昔の記憶が失われていく和子さん。清さんは、会わないと自分のことも忘れてしまう、という不安から、和子さんの居室で1時間半ほど過ごすのが日課になっていた。そんな中、昨年2月、コロナ禍の面会制限が始まった。4カ月待って、ようやく透明なアクリル板越しで面会ができたとき、和子さんは清さんに不審そうな眼を向け、顔を背けて「お父さんが来ん」とつぶやいた。清さんは全身の力が抜け、生きる気力も失いかけた。

6年前、病院の検査で和子さんが認知症と診断された後、清さんと和子さんは二人で入る墓石を買いに行った。認知症が進行する前に、記憶に焼き付けたいと。そのお墓の前で、夫婦、そして息子や孫たちと記念撮影をした。清さんはその頃から写真を撮り続けている。そして毎日、それらの写真や、面会時に撮影した和子さんの写真・動画を繰り返し見ている。「この頃はまだしっかりしていた、この日の面会では私を分かっていた、と思返せる。これが励みです」。コロナ禍で会えなくなり、和子さんの記憶から自分が消えた。それでも、「イチからやり直します」と清さん。清さんは今、一日も早くコロナが終息し、面会制限がなくなる日が来ることを待ち望んでいる。かつてのように和子さんの手を握り、マッサージしながら話し掛けることができれば、わずかでも和子さんの記憶はよみがえるはず…。それが、清さんの生きる希望だ。

やすらぎの郷 生活相談員

## 安達 満さん

「昨年の6月、中止されていた面会が再開したとき、顔を背ける奥さんに山崎さんが落胆している姿を横で見て、とても胸が痛みました。コロナ禍の前まで、山崎さんは『お母さんは、家事も育児も仕事も忙しすぎたから、今ようやく休んでいるんです。私には感謝しかない。これは恩返しです』とおっしゃって、毎日通って来られた。面会できなくなっても『ここにいる人の家族は皆つらい思いをしている。自分だけじゃない』と我慢されていた。少しでも早く、お二人を会わせてあげたい、職員は皆、そう思っていました。

入所者のご家族が会える時間を守るため、感染力が高い変異株が出た時に、施設では感染対策を強化して透明なビニールで空間を完全に遮断したテント面会を始めました。しかし、触れることはできない。この1年半、山崎さんを含め、入所者のご家族は、ご自身が感染しないよう「必死に」自粛生活を送られたようです。万が一感染し、このまま会えなくなったら…と心配されて。コロナが奪ったもの、コロナで犠牲になったことは、あまりに大きいと感じています」



ビニール越しの面会をする清さんと和子さん



施設に入所する前、和子さんは夫を「徘徊(はいかい)」を繰り返すようになった。徘徊のたびにけがをする和子さんに命の危険を感じ、清さんは自宅で介護することを断念した



結婚式当時。同じ高校の後輩である和子さんは明るい人柄で、清さんの目ぼれだった。活発な性格の和子さんは認知症を発症するまでスポーツジムに通い、地域の交流にも熱心に参加していた



和子さんと安達さん。一時期、認知症で怒りっぽくなっていった和子さん、やすらぎの郷の職員の家族的なケアで穏やかになっていった



## お母さんと赤ちゃんの「さい帯血」で 命をつなぐお手伝い

11月15日「世界さい帯血の日」

### 「さい帯血」移植を待つ人のために

「さい帯血」とは母児を結ぶへその緒と胎盤の血液のことで、造血幹細胞を多く含み、白血病患者などの移植治療に使われています。コロナ禍で骨髄移植が減少する中、需要の高まりを見せているのがさい帯血移植。今年3月には移植症例数2万件を突破しました。

日赤は国が指定する事業者として、北海道、関東甲信越、近畿、九州の4カ所のブロック血液センターに「さい帯血バンク」を設置、運営しています。



### 日赤の「さい帯血バンク」事業

日赤が献血などの血液事業で培った高度な検査技術、厳格な管理体制が「さい帯血バンク」に活かされています。



©やなせたかし/やなせスタジオ

日赤のさい帯血バンク事業のキャラクター「ぎずなちゃん」

#### ◎さい帯血の凍結保存

採取されたさい帯血は36時間以内に凍結保存。必要な細胞だけを取り出し、凍害保護剤を用いて凍結保存します。

#### ◎さい帯血の検査

安全にさい帯血移植に使用できるかどうか、造血幹細胞の検査とともに、血液型検査、HLA検査、感染症検査、無菌検査を行います。各種検査に合格したさい帯血のみを提供します。

#### ◎各種データの管理

採取、保存、検査に関するデータのほか、さい帯血移植に関するデータを管理。よりよい移植にするための評価も行っています。厳密な管理で、プライバシー保護にも十分配慮しています。

わたしも赤十字

今月の表紙

赤十字にはさまざまな形で赤十字の活動に参加する支援者がいます。全国の支援者の中から毎月お一人を、温かいメッセージと共にご紹介いたします。

## 赤十字と同じ「地域の守り手」として ハード面から事前防災に取り組む



寄付の協力者

よしむらぶんじ  
吉村文次さん

高知県高知市/62歳/会社経営

学生時代、けがの手術で高知赤十字病院に度々お世話になりました。日赤で働く親類がいたこともあり、赤十字は身近な存在です。平成31年からは経営する建設会社、ホテルがともに高知県支部の赤十字サポーター制度に加入しています。長引くコロナ禍でホテル業界は厳しい状況ですが、そのような中でも災害はいつ起こるかわかりません。日頃から地域で防災などに取り組む日赤と何か一緒に活動できればと毎年寄付を続け、25年以上になります。

また、建設業として公共の土木工事を数多く担う中で注力しているのは、南海トラフ地震に備えた事前防災の取り組み。我々は地域防災における「ハード対策」に貢献できますが、ハードはソフト面があってこそ生きるもの。建設業の強みを生かして地域に貢献できればと、工事現場周辺の方々に声を掛けて避難訓練を実施しています。いざ発災となれば、復旧復興の先頭に立ち、地域の仲間とともに人々のくらしを守りたいと考えています。

人々の地域への関わり方はさまざま。たとえばイベントの企画であったり、口コミでの宣伝だったり、寄付だったり。それぞれの得意分野が活かされて、より良い地域になるよう、日頃から他業界の仲間との意見交換を大切にしています。建設現場は、安心・安全が第一。常に人の命と隣り合わせで大変に気を使います。そんなところは人の命と向き合う赤十字にも通じる場所がありますよね。互いに地域に根付きながら、防災分野などで連携していきたいです。

寄付するあなたも赤十字です

- クレジットカードで寄付
- 郵便局・銀行の口座振替
- 郵便局・銀行の窓口
- お近くの日本赤十字社窓口



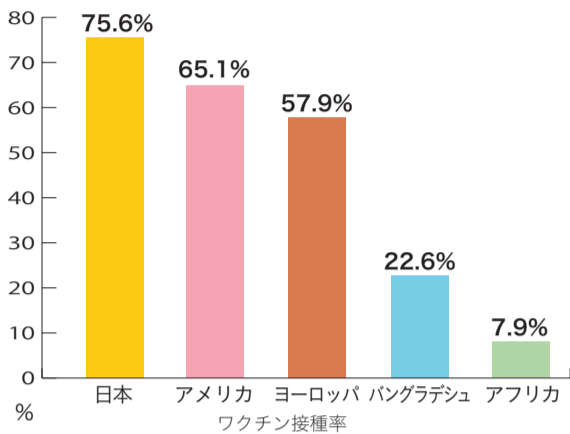


## NHK 海外たすけあい

# 「感染症から誰も取り残さない。」

キャンペーン期間:12月1日(水)~25日(土)

## 格差で失われる命が、あってはならない



2020年に突如現れ、世界中を危機に陥れた新型コロナウイルス感染症。致命的なパンデミックは回復への道を進み始めているようにも思えます。しかし、世界にはワクチンが普及せず、コロナ以前から続く貧困や食糧難、災害や紛争などの危機によって「複合的人道危機」となり、より深刻な影響を受けている国があります。たとえ一部の国でコロナが収まっても世界全体で影響を受け続ける可能性があるのです。



世界各地にネットワークを持つ赤十字は、コロナ禍にこそ強みを発揮します。脆弱な状況で課題を抱える人々が自ら立ち上がり、一人一人が本来持つ力を高める支援を続けています。誰も取り残さず、コロナから学んで前へと進んでいく。そのための「たすけあい」に、ご協力をお願いします。

詳しくは11/18にオープン予定の特設サイトをご覧ください

日赤 海外たすけあい

検索

### NHK 番組情報

「きょうからNHK歳末・海外たすけあい」

12月1日(水) 放送決定! <NHK総合>ほか

「あなたのやさしさを2021~NHK海外たすけあい~」

12月上旬放送予定 <NHK総合>ほか

### 日赤の海外支援に関するその他の番組

11月28日(日) 午後12:30~ 放送予定 <BS-TBS>

バングラデシュで活動する日赤看護師の奮闘をレポートする番組がBS-TBSで放送予定。ご期待ください!

※緊急報道などにより予告なく変更になる場合があります

# 東大脳に挑め!

## 知識を深める赤十字QUIZ

出題 東京大学クイズ研究会(TQC)

知ってるつもりでも、意外と知らない赤十字のこと。東大クイズ研が手掛ける問題にあなたは正解できる!?

NHK 大河ドラマ「青天を衝け」の主人公・渋沢栄一は、近代日本経済の父とも呼ばれ、実業家としての顔がよく知られていますが、一方で福祉や教育などの非営利組織への関与にも大変注力した人物です。今月は、彼と日赤の創立者・佐野常民の交流のきっかけについて問題にしてみました。



### 今月のクイズ

難易度: ★★★

日本赤十字社の創立者である佐野常民は、海外のある行事で赤十字の理念に触れています。彼が渋沢栄一と出会い、その後親交を深めるきっかけとなったこの行事はなんでしょうか?

ヒント  
この万博直後、大政奉還により幕府が倒れた

- 1 1853年 ニューヨーク万博
- 2 1862年 ロンドン万博
- 3 1867年 パリ万博
- 4 1873年 ウィーン万博

答えはP.6へ

# AREA NEWS

全国各地  
あなたの生活のすぐそばで  
日本赤十字社の活動は行われています。

## 青森県 旬のリンゴのアップルパイ 「感謝の気持ちを伝えたい」

10月16日から青森、弘前の両献血ルームでは、献血者に青森県産のリンゴを使用したアップルパイが贈られました。これはリンゴ生産、商品加工・販売を行うタムラファームから寄贈されたもの。合計1250個のアップルパイを届けた同社の田村昌司社長は妻の玲子さんが大量の輸血を必要とする悪性リンパ腫から回復し、献血者に感謝を届けたい、との思いから寄贈を申し出ました。



パイは10月末まで平日先着30人、土日先着50人限定で贈られた

**東大問題に是非あり! クイズの答え**

**3 1867年 パリ万博**

赤十字は、1859年のイタリア統一戦争で救護活動を行ったスイスのアンリー・デュナンが中心となり創設されました。1867年のパリ万博に佐賀藩の使節団として訪れた佐野常民はここの赤十字の展示に感動し、「敵味方の区別なく、救う」というデュナンの理念を受け継いだ日本赤十字社を創設するに至りました。パリ万博で佐野は洗足栄一と出会っています。洗足はパリでチャリティーバザーの存在を知り、彼にとってこの留学は慈善事業を始めのきっかけになったのです。

## 埼玉県 鉄道博物館が献血会場に! 初の試みは大盛況

10月17日、大宮の鉄道博物館で初の献血イベントが実施されました。混雑緩和のため事前予約制とし、感染防止対策を徹底した上で、当日は69人が参加。400ミリリットルの献血協力者には献血キャラクター「けんけつちゃん」をデザインし、E5系新幹線を模したオリジナル記念品が贈られました。鉄道ファンの参加者からは「今までにない経験ができた」との声も寄せられました。



「鉄道の街・大宮らしい記念品がうれしい」と地元の参加者

## 神奈川県 「手話言語の魅力伝えたい」 JRC加盟校が全国大会で入賞

10月3日に開催された「第8回全国高校生手話パフォーマンス甲子園」で、JRC(青少年赤十字)加盟校の神奈川県立横浜南陵高等学校が全国53チームによる予選を突破し、第3位に入賞しました。同校は赤十字精神に基づくボランティア活動を長年継続。今大会では、社会福祉部の19人が手話言語と演劇を織り交ぜたパフォーマンスで「手話言語の楽しさ」を表現しました。



↑コチラから入賞動画をチェック(手話パフォーマンス実行委員会)

## 茨城県 高齢者を交通事故から守ろう! 夜間に光る事故防止グッズを配布

昨年度、茨城県内では交通事故死の約6割が高齢者、さらにその半数が夜間帯の事故でした。そうした現状を踏まえ、日赤茨城県支部は県警察本部と連携し、県赤十字有功会の協力も得て、高齢者の交通事故防止に役立つ反射材グッズを製作。グッズの一部は秋の全国交通安全運動(9月21日~30日)にあわせ茨城県交通安全協会を通じて配布されました。



衣服を挟んで装着できるマグネットクリップや反射材つきの手袋

## 長野県 「地域の子は地域で育てる」 商業施設で里親制度を啓発

松本赤十字乳児院は10月3日、里親制度の啓発イベントを松本市の商業施設で開催しました。10月の里親月間にあわせて行われた催しで、親元で暮らせない子どもを一般家庭と同様に養育する「養育里親」や「養子縁組里親」といった制度の概要をパネルで解説。里親家庭を自治体とともに支える「コミュニティー・ファミリー・パートナー」を紹介するチラシも配布しました。



「一人でも多くの人に里親制度を知ってもらいたい」と乳児院職員

## 福井県 避難所生活ってどうなってるの? 食事やトイレの実情をパネル展示

9月1日の防災の日にあわせて、避難所生活について考えるパネル展示が福井赤十字病院のエントランスホールで開かれました。日赤福井県支部と同院の専門認定看護師委員会が作成したパネルは、食事、寝床、排泄の問題を「命を守るT(トイレ) K(キッチン) B(ベッド)」とクローズアップして紹介。健康管理の視点から避難所生活を想像できる機会となりました。



避難所でも自らの体調を考えて過ごしてほしいとの思いが込められた

## 山口県 食物アレルギーに配慮した炊き出し訓練でみんな笑顔に

日赤山口県支部では、食物アレルギーに配慮した炊き出し訓練を10月3日に実施しました。今回の取り組みは日赤が防災士、アレルギーっ子家族の会と共催したもので、災害発生時においても「食物アレルギーの子どもを抱える家庭に寄り添い、安心して避難できる仕組みを考えたい」との思いでレシピを考案。日赤からは地域奉仕団と学生奉仕団も参加しました。



7月から勉強会を重ねて完成した献立。子どもたちも真剣に調理

## 鹿児島県 先生も赤十字救急法の講習で運動会・体育祭に備えます

日赤鹿児島県支部では9月16・17日の2日間にわたって、応急手当などを学べるオンライン講習をJRC加盟校の教職員向けに開催しました。この講習には秋の運動会・体育祭シーズンに備えようと両日とも40人以上の教職員が講習に参加。運動会や体育祭で起きやすいけがなどに対応する観察や固定法といった応急手当の基本、担架の使い方などについて学びました。



県内各地の教職員が参加し、チャットを活用した質疑応答も実施

## 香川県 西日本豪雨災害から学ぶ、「避難所になった学校」とは

日赤香川県支部は9月21日、令和3年度青少年赤十字指導者研修会を開催しました。今回の講師として登壇したのは、岡山県倉敷市立菌小学校の高津智子校長。同校は平成30年に発生した西日本豪雨災害で、およそ3か月にわたり地域の人々の避難所となりました。その避難所で日赤の救護班が活動したことが縁で今回の企画が実現。

研修会の壇上に立った高津校長は「西日本豪雨災害 そのとき それからの学校」と題して、被災当時の学校の状況や学校再開に向けた取り組みについて、スライドを交えながら説明。菌小学校が避難所となっていた3か月のうち、後半の1か月は避難所として活用される中で授業を再開しており、その貴重な経験を踏まえて学校による避難所運営の実態や課題について、具体的な事例を挙げながら詳しく解説しました。



(左上)高津校長は学校の防災教育の見直しについても言及(右上)参加した教職員たちは被災体験に熱心に耳を傾けた(下)被災状況と学校の位置関係などをマップで解説

**大好評につき、今月もプレゼント!**

**2022年版が販売開始!**

**赤十字手帳と赤十字カレンダー**

今年もセットでプレゼント。応募方法は下記をご覧ください。

**10名さまに**

**赤十字手帳2022年版**  
赤白リバーシブルカバー  
別冊赤十字便覧  
(約15cm×9cm)  
(350円税込込み・送料別)

**赤十字カレンダー2022年版**  
壁掛けカレンダー  
(B3、13枚つづり)  
(935円税込込み・送料別)

【お問い合わせ・ご注文】  
株式会社サービス TEL:03-3437-7516 FAX:03-3459-1432

ニッポンの赤十字ゆかりの地を巡る vol.8

# 赤十字名所紀行

かつて病院船としても活躍した、現存する貴重な産業遺産

横浜の観光スポット・山下公園の目の前に係留されている氷川丸は1930年に完成、戦前の日本で建造され現存する唯一の貨客船として国の重要文化財にも指定されています。今から90年前、貨客船として横浜とシアトルを往復していた氷川丸は、第2次世界大戦中の1941年11月に海軍に徴用され、病院船へと改装されました。国際条約に則り、船体と煙突は白色塗装、船体側面には緑色の1本の帯が施され、両舷の中央と煙突に計5個の赤十字マークが描かれました。造りが大変頑丈な氷川丸は、任務中3度にわたり触雷するも厚い鋼板に守られ大破・沈没を免れました。終戦までの3年半の間、ラバウル、ジャカルタ、サイパン、マニラなど計24回の航海で3万人もの戦傷病兵を輸送。現在も博物館船として公開されており、船内を見学することができます。

**氷川丸 (神奈川県横浜市)**

客室や船倉などの大部分が、病院設備や病室などに改装された

写真提供:ピクスタ

日本郵船歴史博物館所蔵

「赤十字を応援!」プレゼント パートナー企業紹介 vol.19 五十嵐漆器株式会社

## 日光東照宮を造った”匠“の技術・日光彫を活かした唯一無二の社会貢献

寛永11年(1634)から13年(1636)にかけて、徳川家光が、東照宮を現在の壮麗華麗な社殿に造り替えたとき、全国から集められた名匠が余暇に彫ったのが始まりとされる伝統工芸の日光彫。”匠“の技が光る日光彫の製造直売、卸販売を手掛ける五十嵐漆器は、昭和6年の創業以来、木工製品から始まり多くの銘品を生み出してきました。全国の工芸品の販売やオリジナル製品の制作を手掛ける同社は、社会貢献活動にも熱心で、平成19年度より日赤栃木県支部への支援活動をスタート。寄付やボランティア活動だけでなく、寄付・義援金の募集で使用するチャリティーボックスと呼ばれる木箱の制作や、国際交流事業の記念品など、得意な分野での貢献も積極的に行っています。日光の伝統の楽しさを伝え、笑顔で暮らせる地域づくりに貢献したいという思いから、経験豊かな伝統工芸士から丁寧な指導が受けられる体験学習を、地域の子供たちなどへ行っています。

3名さまに

高い実用性と高級感を併せ持つ、赤牡丹が彫られた漆器の高級ペン立て

商品写真はイメージです

上記プレゼント希望者は、以下の項目を明記のうえ、郵送・FAX・WEBでご応募ください。①お名前 ②郵便番号・ご住所 ③電話番号 ④年齢 ⑤赤十字NEWS 11月号を手にした場所(例/献血ルーム) ⑥11月号に関するご意見・ご感想 ※ご応募いただいた個人情報はプレゼントの発送および弊社からのお知らせのみに利用いたします。

郵送/〒105-8521 東京都港区芝大門1-1-3  
日本赤十字社 広報室 赤十字NEWS11月号プレゼント係  
FAX/03-6679-0785 WEB応募/右の2次元バーコードからご応募ください。  
11月30日(火)必着 ※当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます

こちらから応募できます

# WORLD NEWS

コロナ禍でも不変の支援を

ルワンダ共和国

## ルワンダ—— 貧困の連鎖を断ち切るために

ルワンダ赤十字社との二国間事業が開始した直後の2020年3月、ルワンダで初めてCOVID-19の感染者が確認されました。新たに浮き彫りになった課題について、日赤から現地に派遣されている吉田拓がレポートします。

### コロナ前からの根深い課題が…

ルワンダ共和国のロックダウンに伴い、一時帰国していた日赤の職員、吉田拓が支援地に戻りました。日赤が支援事業を行っているのは、ギザガラ郡というルワンダ南部にある農村地域です。

「現地にいると、村人たちにとってCOVID-19が新たな脅威だと認識するのは難しいことなのだと感じます。なぜなら、これまでも彼らはマラリアなど従来の感染症、気候変動により多発する自然災害、1人当たり1日2ドル以下で暮らす慢性的な貧困など多くの苦しみの中で生きてきました。食うや食わずで今日を生き延びることが日常となっている彼らは、コロナ以前から災害状態が続いていたのです」

そもそもこの村は「手洗い」という公衆衛生の基本もままならない環境です。

「給水設備のないこの村では、舗装されていない山道を30～40分かけて水くみ場まで行き、



© Atsushi Shibuya / JRCS

生活のために水汲みをするルワンダの子どもたち

ポリタンクのために生活用水を確保しています。1日何往復もするこの仕事を主に担っているのは子どもたちです」

### 村人の自立、子どもの環境改善 東京の学生たちも支援に動きだす

日赤は2019年12月より5カ年の計画で、ルワンダ赤十字社との二国間事業を実施。村人たちが主役となり、災害や貧困などに対して自ら立ち上がる力を高める「モデルビレッジ」事業を展開しています。

「ルワンダ赤十字社には熱心なボランティアがたくさん参加していて、彼らと共に、自分の畑を持たない農民も食料が得られるように家庭菜園の種を配布したり、共同で育てる家畜を提供するなど、複数の支援を同時に進行させています。そして現在、給水設備の設計が始まりました。感染対策に欠かせない衛生環境の改善、そして子どもたちの教育や育成環境が劇的に改善することを期待しています」

また、吉田のオンライン講演を聞いた日赤東京都支部の大学生ボランティアが有志で集まり、小学校を長期欠席する子どもたちの状況改善に向けたプロジェクトに協力しています。

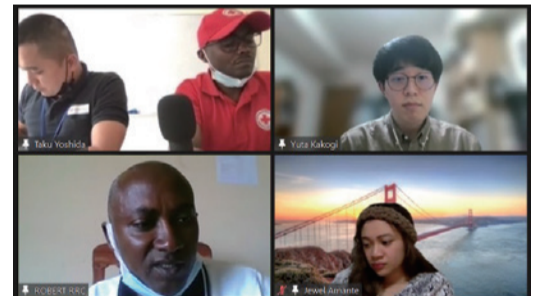
「大学生ボランティアたちは子どもの問題に対する意識が高く、オンライン会議で次々と鋭い質問を投げ掛けてきます。彼らは、子どもの貧困の原因は、親も貧困の中で育った『貧困の連鎖』



カメラに向かって「赤十字、団結しよう!」と声をそろえる吉田拓(写真中央)とルワンダ赤十字社のボランティア

にあると指摘します。実際、長期欠席やドロップアウトしたルワンダの子どもたちにヒアリングを行なったところ、貧しい家庭ほど生活が苦しくなると子どもの教育から諦めるという実態が明らかになりました。大学生たちとの意見交換は、ルワンダの職員も自分たちの活動を再確認する機会になっています。さらに来年度、東京都支部が計画している『ルワンダ子ども支援募金』の事業内容も大学生たちの意見が反映されて策定されました。

11月には、大学生たちが青少年赤十字(JRC)の中高校生たちに対して、ルワンダ赤十字社との交流によって得た知識や気づきを伝える場が設けられます。彼らへの啓発が今後のJRCの募金活動を左右することになります。ルワンダと東京は距離にして1万数千キロも離れていますが、東京の大学生ボランティアの気持ちはルワンダの子どもたちに寄り添っているなど感じられます」



ルワンダ赤十字社職員とのオンライン会議をする日本の大学生

## 赤十字、 世界の「現場」から

supported by ICRC

赤十字国際委員会(ICRC)が展開する紛争地での保護活動や避難民支援。その活動現場で切り取られた、知られざる世界の姿、世界の課題。

ICRCが幼い姉妹を祖母に引き合わせた時、72歳の祖母は極貧生活を送っていましたが、孫たちを育てる決断をしました。姉妹の両親はルワンダで大虐殺が起きた際に国外に逃げ、その後、相次いで病死。姉妹は里親にひどい扱いを受けていましたが、祖母と暮らすことで、貧しくても子どもに最も必要な家族の愛を得ました。

ICRC「離散  
家族への支援  
(ファミリー  
リンク)」とは



紛争や自然災害、移住などで離ればなれになった家族。愛する家族の居場所や消息が分からない時の苦しみは計り知れない。ICRCと各国赤十字・赤新月社は、行方不明者の居所を探し、親族と再び連絡を取り合えるようにする「離散家族への支援」を行っている。



© COHEN, Nadia Shira / ICRC